

「不立文字、教外別伝」の真精神

田 島 柏 堂

本学院の建学の精神たる「行学一体」の訓えに則り、本研究所が発足してから、すでに十有余年になる。途中、所長伊藤猷典博士が病床に臥せられたことは、誠に遺憾であった。その後、学院長竹田鉄仙先生により、従来の大学だけの「禅学研究所」であったのを、さらに拡充し、大学をはじめ全学院を挙げての「愛知学院禅研究」に改組され、以後、本学院の教職員が一体となって、禅の探究およびその普及につとめ、いささか社会一般に貢献してきたことは、洵に喜ばしい次第である。

このたび不肖私は、図らずも初代所長故伊藤猷典博士の後を受けて、所長に嘱任せられ、この不安と激動の時期に当り、その責任の重大さを痛感するものである。しかし命を受けた上は、本研究所創立以来、関与してきた経験を生かし、微力ながらも最善の努力を尽してこの重責に当る覚悟で、竹田学院長先生の意図と伊藤前所長先生の遺志を承け嗣ぎ、本研究所を一層充実発展させ、その目的達成に尽力いたしたいと思う。

由来、禅宗は「不立文字、教外別伝」の思想を標榜している。従って他の宗派のごとく特定の経論を所依として立てるのでなく、直に仏心印を単伝し、師資面授相承を一宗の根源となしている。しかしこれまで一般に仏教では、経典は仏教の究極の依りどころ、すなわち所依ということになっており、仏教各宗が立教開宗する時、つまり各宗の開祖が、仏教の新しい形態を建立する場合には、その真理性の最後の根柢を、普通は必ず経典の上に求めてきたのであ

「不立文字、教外別伝」の真精神（田 島）

る。仏教では従来、真理の最後の規範は經典にあるのであって、經典に依りどころのないものは真理とはいえないことになっておる。ゆえに各宗にはその真理性の究極として、必ず所依の經典がある。ところが禪宗では、經典を常用しながら、これを最後の依りどころとしない。禪では、經典を真理の最後の規範とする仏教の經典 *dogma* や、經典 *magic* や、それらの非根元性を痛烈に批判し、それから脱却して、經典の根元すなわち經典以前に還ろうとしたのである。一般の教宗が經論に無上の教権を認め、徒らに文字言説に拘泥して浅深優劣を判じ、取捨を敢えてするは本を忘れて末に走るもの、指を守って月を見ざるもの、筌蹄を守って魚兔を獲ざるものであり、実に教義論説に執着して、最高の真理たる仏心を体験するを忘れたるものと云わねばならぬ。ここにおいて禪宗は「不立文字」をモットーとし、教網を脱却せしめようとしたものであって、禪の「不立文字、教外別伝」の思想の真意はここに存するのである。従って文字による經文を不用であると拒否したのではなく、また仏陀の教説以外に特別なる正伝が存するというのではなく、文字教説そのものに対する固執を破却することを誡めたものである。ゆえに教理を排したり、文字を斥けたりせよという意味ではない。文字を尽し、教理を極め、文字教理の及びいたらざるところに、さらに深き思想の根柢を有することを意味するのである。一切の經典に依らざるは、一切の經典よりもさらに多く、さらに大なる經典に依るべきゆえんを意味するものである。されば經典は、禪の本質を捉えさせようとする文学的表現であり、禪は經典の精神に生きようとする宗教的生命であるということができよう。

しかるに後世の禪徒は、その精神のあるところを知らないで、この思想を解するに文字無用論なりとし、仏典を認めず、經文を否定し、經論を疎外するをもって、禪の特色なるかのごとく誤謬するにいたつたのである。道元禪師は、すでに正法眼藏仏教の卷に「ただ一心を正伝して、仏教を正伝せずといふは、仏法をしらざるなり、（中略）仏正法眼藏を単伝する仏祖、いかでか仏教を単伝せざらん、いはんや釈迦老漢なにとしてか仏家の家業にあるべからざらん教法を施設することあらん、（中略）しかあれども教外別伝を道取する漢、いまだこの意旨をしらず、かるがゆゑに教外別伝の謬説を信じて仏教をあやまることなかれ」云々と誡められている。しかして禪宗が「不立文字、教外別伝」の

思想を標榜しているにも拘わらず、事実においては最も文字が多く解会が多い。禅宗の祖師の多くに撰著が多数存し、わが宗においても道元禅師には九十五卷の正法眼蔵を初め、数多の撰述があり、宝山禅師には伝光録を初め、許多の撰述が存するゆえんである。されば道元禅師は「至理は言語道断し、心行処滅なり、(中略)いはゆるもし言語道断、心行処滅を論ぜば、一切の治生産業、みな言語道断し、心行処滅なり、言語道断とは、一切の言語をいふ、心行処滅とは、一切の心行をいふ」(正法眼蔵安居)と述べられ、宝山禅師は「たとひ心さどく耳ときによりて、諸ろの書籍聖教をもて一字にも遺落するところなく、聞持すといへども、心もし通ぜずんば、徒に、となりの宝を算ふるがごとし、うらむらくは、経教にそのころなきにはあらず」(伝光録第二章)と述べられ、さらに道元禅師は「しかあれば経巻は、如来全身なり、経巻を礼拝するは、如来を礼拝したてまつるなり、経巻にあひたてまつれるは、如来にまみえたてまつるなり、経巻は如来舍利なり」(正法眼蔵如来全身)とあり、また宝山禅師は「ゆへに一一自己の宝蔵を打開して、一大蔵経を運出せんとき、聖教おのづから我有なることをえん」(伝光録第五章)と示さるるゆえんである。実に道元禅師の絶対否定即肯定の經典依用の立場より云う時は、先に道元禅師が「言語道断とは、一切の言語をいふ、心行処滅とは、一切の心行をいふ」と述べられたがごとく、今もまた「教外別伝とは一切の教説をいふ、不立文字とは一切の文字をいふ」というべきであつて、両禅師の精神から眺めて決して不立文字は不用文字を意味しない。文字は宗意そのものの表現であつて、これを通して仏祖の精神を把握することができるのである。もちろん体験の内容は、文字言句等に局限せられた概念の世界を超越しているけれども、自証の片鱗を示そうとするには、勢い文字言句を藉りる外はない。元来、釈尊大悟の源頭に宗旨の根柢をおくのであるから、一切の経論は皆悉くその儘に禅門の所依であり、禅宗の典籍であるということにもなるのであつて、文字を捨てるのではなく、文字を通して文字に非る底を学得するのである。すなわち一切の文字一切の経論の指示する本旨を会得せんとするのである。もつて禅宗ほど文字による表現を依用し、重要視した宗派も少ないであろう。されば禅宗は、彪大なる典籍を残しており、かつ禅籍の撰著・開版が汗牛充棟もただならざるゆえんである。従つて「不立文字」とは、普遍的な命題のかたちで立言

「不立文字、教外別伝」の真精神(田 島)

「不立文字、教外別伝」の真精神(田 島)

しない、またそれに従って行動しないという意味なのである。ゆえに禅宗は依文解義の教宗のように、經典の研鑽や諷誦が主要目的でなく、参師問法、工夫坐禅を本旨とするのである。

かかる「不立文字、教外別伝」の思想をモットーとする禅は、今や「世界の禅」として、欧米においても深い関心を持たれ、広く全世界的なものとなっている。従って禅に関する諸文献の翻訳・研究、或は実参実究(坐禅)が活発に行われていることは、周知のとおりである。伝統的な宗派仏教としての禅ばかりでなく、禅を凡ゆる方面から参究する動きが存することは、注目すべき事柄である。禅は単なる理論ではなく、坐禅という行を通して、その宗教的真理を实なるものとする。されば本研究所の所員各氏には、「行学一体」、「不立文字、教外別伝」の真精神に則って、学的研究および実践的参究の両面にわたり、今後、絶えず研修活動を続けられ、所期の目的を達成されるよう心から属望するものである。

なおこの際、本研究所規程の一部を改正し、新たに研究員制度を設けて、学内の所員はもちろん学外の学識経験者のうちからも研究員を委嘱し、もっぱら禅学の研修を行なうこととした。さらに従来の誌名「禅学研究」は、他に同名の学会誌が存し、しばしばこれと混同されてきたため、ここに「禅研究所紀要」と改名し、これを機会に内容の刷新と充実をはかると共に、創刊号として再発足することにした次第である。

願わくは、今後、一層内外関係各位の御協力と御支援御鞭撻を賜わり、研究員、所員各氏の研鑽・参究および本研究所の向上発展と共に、禅がますます顕揚されることを陰ながら祈念するものである。ここに「禅研究所紀要」の創刊号を刊行するに当り、所長就任の挨拶旁いささか所懐の一端を述べて、巻頭の言葉とする。

(一九七二・四・八・釈尊降誕の辰)